

2016年度 研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは日程を1日、1回のみに変更し、院生によるコース紹介・研究室紹介と個別相談を実施した。

<実施概要>

◆日時：2016年5月25日 17:00～17:50

<コース紹介>

山田翔平（図書館情報学研究室）

松尾有美（社会教育学・生涯学習論研究室）

ワンデーセミナー記録

本年度も図書館情報学研究室と社会教育学・生涯学習論研究室の研究交流を目的として、両研究室の大学院生が研究内容を発表した。

<実施概要>

◆日時：2016年9月8日 10:00～14:20

◆会場：赤門総合研究棟 A210 教室

◆発表者：西川昇吾，山田翔平，高橋恵美子，大山宏，矢田竣太郎

2016年度 講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅳ】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，新藤浩伸

S1期のゼミでは、社会教育分野におけるこれまでの研究動向を広く理解するために①日本社会教育学会編『現代教育改革と社会教育（講座現代社会教育の理論Ⅰ）』（2004），②日本社会教育学会編『現代的人権と社会教育の価値（講座現代社会教育の理論Ⅱ）』（2004）の2冊を講読した。教育とは何か、教育を受ける権利とは何かなど、社会に存在する既存の価値観をゼミの議論の中で積極的に捉え返していった。議論を通じ、およそ10年前の社会教育領域が抱える課題意識（社会教育の専門性の問題や権利論の捉えられ方）が、現在の社会や社会教育を考えるのにも通ずる、多くのキーワードを内包していることを改めて確認し、これから先の社会教育の姿をゼ

ミの時間の中で深く考えることができた。

【生涯学習論特殊研究Ⅳ】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，新藤浩伸

A1期のゼミでは、①日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化（講座現代社会教育の理論Ⅲ）』（2004），②日本社会教育学会編『社会教育研究における方法論』（2016）の2冊を講読した。①では、主に成人学習論の展開と社会教育との関わりについて議論を行い、成人個人々の学習を、どのように地域や社会の変化へとつなげていくかといったことが話題となった。また②では、これまで社会教育学では明示的に取り上げられることが少なかった研究方法論がテーマである文献を講読し、多様な研究方法の展開を見ていく中で、社会教育学の固有性とは何かということについて改めて議論を行った。

【生涯学習論論文指導】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，新藤浩伸

本ゼミは、研究室所属の大学院生が各自の研究を報告し議論する場として毎週開講されている。各学期において学会発表、投稿論文、修士・博士論文などの内容や、研究構想について報告し、参加者全員で議論を行った。各院生の研究テーマは様々であり、本年度は、子どもや若者の生活に関する研究、高齢社会と学習に関する研究、労働・就労問題と教育に関する研究、文化教育施設や職員の専門性に関する研究、外国におけるまちづくりやコミュニティ活動に関する研究、多文化社会に関する研究など多岐にわたった。個人々の研究内容の他に、研究方法についても議論が及び、参加者全員で問題を共有できたことは、研究を進めていく上で有意義であった。

【成人教育研究の理論と方法】担当：非常勤講師・高橋満

地域や職場における成人の学びを探究するさいの基礎的知識と分析視角について講義された。

講義においては最初に、学校教育と比較した成人教育特有の空間、方法、理論について、博物館教育を事例に取り上げつつ検討された。次に、社会教育・成人教育としての「地域づくり」の実践が取り上げられ、「地域づくり」実践を社会教育・成人教育的視点から分析・評価する手法が検討された。最後に、地域における成人教育実践を取り巻く戦後以来の日

本社会の変化, 実践を支える教育行政・政策の理念的転換, そしてこれに影響を与えてきた国際的な成人教育論の変遷について概括的な議論が提示された。

大学院在籍時から現在に至るまでの講師自身の問題関心や研究成果に関する話題もあり, 受講者間で活発的な議論がなされた講義であった。成人教育の原理論的研究の必要性はもちろんのこと, 実践や制度, 政策の文脈性を意識した研究を行うことが重要であると確認された。

【プログラム評価論】担当: 非常勤講師・安田節之

教育機関や企業組織, 地域コミュニティで行われる対人援助・人材育成・組織開発・地域活性化などを目的とした多様な実践・介入活動プログラムについて, 客観的に結果や効果を評価し質の向上につなげるための方法論を学ぶ講義である。講義ではディスカッションをはさみながら評価の目的やアプローチ, インパクト理論, 評価クエスチョンなどといった評価の基礎的な事項について学んだ。その上で受講者は小グループに分かれ, 各自評価の対象とするプログラムを設定してロジックモデルを設計した。また最終レポートとしてそれぞれのプログラムについて評価計画書を作成した。プログラムを客観化し, 誰の, 何のための評価なのかということ意識して評価にあたることは, プログラムの質向上を図る上でも有用な視点であると思われた。

【図書館情報学総合研究】担当: 教授・影浦峯

【図書館情報学論文指導】担当: 教授・影浦峯, 客員教授・吉田右子

本講義は通称「総合ゼミ」と呼ばれ, 主に図書館情報学研究室所属大学院生が参加し, 各自の研究テーマの進捗状況について共有したり, 学会発表の練習をしたりする場となっている。基本的には隔週開講で, 参加者は半期ごとに1回以上の発表機会を持ち, 各回2名程度が発表する。本年度は実験的に, 4月から5月にかけて研究の手続き・方法や論文を書く際の注意点などを共有する「研究ガイダンス」を実施した。参加者が各項目について調査・整理し, 研究を進めるという行為に関する極めて基本的・実際の情報共有をしたのである。従来の総合ゼミで, 各発表者に対して単発的に行われてきた研究の進め方についてのアドバイスを集約したかたちとなる。その後は各自の研究内容の共有を主としたが, 10月

には筑波大学にて吉田右子客員教授の研究室と合同で, 両研究室から数名ずつ研究報告をするゼミを開催し, 活発な議論を交わした。また, 年度最後のゼミでは本年度に提出された修士論文の検討会を実施した。

【図書館情報学研究方法論】担当: 教授・影浦峯

夏学期の影浦ゼミでは, Degroot と Schervish の *Probability and Statistics* の第4版をテキストにして, 確率論を題材としながらいかにして専門書を読み解くかという方法を学んだ。

例えば, テキスト内の定義・定理・命題等をそのままノートに書き写すこと, 本文に出てきた単語の定義を理解しているかチェックし, していなかった場合は定義を参照すること, 定理等で理解できているかをチェックするために図示してみること, 例の活用の仕方, 命題等の仮定と結論を明記しておくこと, そして理解が困難な箇所については自分なりの解説などを付け加えることなどである。

ゼミは, 発表者を一人決め, 発表者ごとに担当箇所を割り振り, その箇所について発表者が抗議・解説をし, その後全員で疑問点などを出し合い, ディスカッションをするという形式で行われた。

発表は英語で行われ, 質問・議論等は日本語と英語の両方で行われた。

【情報媒体構造論】担当: 教授・影浦峯

2016年度の『情報媒体構造論』と題された集中ゼミでは, 論理学における量子の扱い方について学んだ。Proofs and Fundamentals: A First course in Abstract Mathematics というテキストの第1章を参考にした。指定された箇所を参加者全員が一定時間の間に読んで, ②読んだ部分の内容についてコーディネータを一人設定して議論をする, というサイクルを一日の間に何度か繰り返して進めていった。このゼミでの最終的な目標は, 全称量子と存在量子を含んだ命題「全ての人がある果物を毎日食べている」の否定の操作ができるようになることであった。学習内容としては, 論理演算子と真理値表, 集合演算, 量子子の操作を学び, 命題を論理式に落とし込んで考えることを覚えた。結果としては, 参加した学生全員が, 先述の量子子を含んだ命題の否定の命題を作成するという操作を, 手順を確認しながら行うことが可能になった。

【北欧の生涯学習と図書館】担当：客員教授・吉田 右子

本講義は、北欧における生涯学習の拠点としての図書館に関する体系的な知識の習得を目的とするものである。講義ではデンマーク、スウェーデン、ノルウェーとフィンランドの公共図書館に焦点が当てられ、図書館の写真資料とその他マルチメディア資料を通して、その機能、歴史、サービス、利用者と司書について多面的に学んだ。人々の暮らしにおける図書館の位置付けを語る際に欠かせない北欧の気候と環境についても紹介がなされた。ゲストスピーカーである筑波大学大学院博士課程の和気尚美氏による3回の講義では、デンマークの公共図書館における移民を対象としたサービスが、実際に図書館で配布されている資料とともに紹介された。

最後の2回の講義では、受講生が北欧の教育という大枠の中で各々が設定したテーマに関する発表を行った。シティズンシップ教育、発達性ディスレクシア、文化政策、ICTの活用、職業教育、高齢者政策、美術館、劇場施設、子育て、教員養成など多岐にわたるテーマについての議論を通して、生涯学習における図書館の役割と可能性を見直すことができた。

【デジタルドキュメント論】担当：非常勤講師・阿 辺川武

デジタルメディア上で配信・流通・利用・保存されるドキュメントであるところの「デジタルドキュメント」に関する様々なトピックを、講義形式を基本としながら数回の演習を交えて学習した。扱われたトピックはデジタルドキュメントの歴史的な位置づけに始まり、その技術的構成要素、データ構造、学術分野での発信と利用、電子書籍・電子出版における動向、インターネット上での存在形態、保存方法と多岐にわたった。講義では数回のレポートやディスカッションが実施された。一方演習では、デジタルドキュメントに関連した企業の展示会「コンテンツ東京2016」やデジタルドキュメントを駆使した展示を扱う「お茶ナビゲート」の見学、及び電子書籍・電子辞書端末の体験ができるカフェ「GLOCAL CAFÉ」での電子出版業界関係者を交えたディスカッションがなされ、いずれも民間での実践について直接触れられる有意義な機会を得ることができたのであった。

2016年度 個人研究報告

(図書館情報学研究室 博士課程)

[井田浩之]

現在、東大は休学して、UCL Institute of Educationの博士課程で研究をしております。2016年度は学会発表3件、論文集に1件、雑誌投稿1件ずつ成果を発表しました。現在の研究テーマは、情報リテラシー教育を機関内(学生、教員、図書館)で有機的に機能させるための理論的検討とそれを確認する実証研究を行っています。

進捗状況としては、中間論文審査(upgrade)には通過し、実証研究に向けた学内での研究倫理審査に通過したところです。2017年初頭にイギリスの高等教育期間を対象に、学生、教員、図書館員に情報リテラシー教育の経験を調査するインタビューを実施予定です。そのあと、データの分析を行い、全体を執筆して、2018年度中には博士論文を提出したいと考えています。

2017年度は、実証研究を中心に、全体の構想を強固なものにしていきたいと思っています。

[高橋恵美子]

本年度は学校司書についての本のための執筆作業を行った。9月のワンデーセミナーで「学校図書館専門職制度確立の要件に関する考察」を報告、その後博士論文執筆のための文献調査等を行っている。

日本図書館協会学校図書館職員問題検討会の委員として、文科省研究協力者会議の論点整理(案)に対する意見(2016年5月公表)、検討会報告書の作成及び同報告書(案)についてのパブコメ意見とそれに対する考え方(両方2016年10月公表)のまとめに関わった。8月、日本図書館協会学校図書館部会第45回夏季研究集会で「学校図書館職員問題検討会報告」、学校図書館問題研究会第32回全国大会分科会8で同検討会の報告、10月第102回日本図書館協会全国図書館大会第3分科会学校図書館で「学校図書館職員問題検討会報告書、作成経過と内容」報告を行った。検討会報告書に関して、『出版ニュース10月下旬号』(出版ニュース社)に「学校司書の新しい資格の提言まとまる」を執筆した。

[宮田玲]

2016年1月～12月の主な研究活動は以下の通りで

す。

1. 執筆／発表

【研究書】 Rei Miyata, Anthony Hartley, Kyo Kageura, Cécile Paris. ‘Garbage Let’s Take Away’: Producing Understandable and Translatable Government Documents: A Case Study from Japan. *Social Media for Government Services*, Springer, pp. 367–393, 2016.

【国内学会】宮田玲, 藤田篤, 内山将夫, 隅田英一郎「機械翻訳向け前編集の事例収集と類型化」言語処理学会第22回年次大会, 仙台, pp. 869-872, 2016年3月.

【国際会議】Rei Miyata, Anthony Hartley, Cécile Paris, Kyo Kageura. Evaluating and Implementing a Controlled Language Checker, *International Workshop on Controlled Language Applications (CLAW 2016)*, pp. 30–35, Portorož, Slovenia, May 2016.

【招待講演】宮田玲「制限オーサリングと機械翻訳」名古屋地区 NLP セミナー, 名古屋大学, 2015年11月29日.

【国際会議】Rei Miyata, Kyo Kageura. Constructing and Evaluating Controlled Bilingual Terminologies, *International Workshop on Computational Terminology (CompuTerm 2016)*, pp. 83–93, Osaka, Japan, December 2016.

【国際会議】Rei Miyata, Anthony Hartley, Kyo Kageura, Cécile Paris, Masao Utiyama, Eiichiro Sumita. MuTUAL: A Controlled Authoring Support System Enabling Contextual Machine Translation, *International Conference on Computational Linguistics (COLING 2016)*, system demonstrations, pp. 35–39, Osaka, Japan, December 2016.

2. その他

・有期技術員, 情報通信研究機構 (NICT) 先進的音声翻訳研究開発推進センター 先進的翻訳技術研究室.

・プログラム委員, NLP 若手の会 (YANS).

・プログラム委員, Young Researchers Symposium on Natural Language Processing (YRSNLP 2016).

〔新井庭子〕

(概要) 小・中教科書のテキストを比較した時、そこには語彙だけでは説明のつかない形式の難しさのギャップが存在する。

テキストの難しさの研究として、既存の研究ではテキストか人間の認知かどちらかしか研究対象にされてこなかった。今後の研究では、最終的に人間の読解を困難にするテキストの形式の特徴に着目し、人間の読みとテキストの両方を研究対象とする。

それに先立って、今年の研究ではまず読みを困難にするテキストのパラメーターを予測し、小・中教科書テキストの間にそのパラメーターで表現できるギャップがあることを示した。文構造に着目し、係り受け関係の複雑さや定義表現の多さなどのパラメーターを設定した。

本研究は、最終的に、示したパラメーターで難易度推定式を作り、読解力テストの結果と照らし合わせ、これを正解データとして難易度推定式の精度を上げることを目指すものである。

〔矢田峻太郎〕

2016年度から本コース博士課程に進学した。卒業論文から継続・延長した研究テーマである『「前読書家」を触発する図書推薦システム』の完成を博士論文の内容とするつもりで取り組んでいる。本年度は、6月に国内学会「電子情報通信学会 言語とコミュニケーション研究会」での口頭発表、12月に国際学会「International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries」でのポスター・口頭発表を行った。また、研究テーマに深く関連する領域のトップカンファレンスの1つである International Conference on Computational Linguistics に参加し、最新の知見と関連研究者との交流を得ることができた。加えて、上述の国内学会をきっかけに、10月より KDDI 総合研究所で半年間のインターンに従事する機会を得、週に2日程度の頻度で指導を受けた。

〔山田翔平〕

2016年度は、「基盤(B)知識基盤としての出版メディアの変容に関する実証的研究」の一環として岩波新書の物理的、形態的特徴について記述する研究を行った。この研究成果は、“Physico-symbolic characteristics of Japanese paperback book series Shinsho: A descriptive study” というタイトルで、

The 7th Asia-Pacific Conference on Library & Information Education and Practiceにて発表した。さらに、修士論文の内容を基として雑誌投稿論文の作成を行った。タイトルは“The conceptual correspondence relation between an encyclopaedia and Wikipedia”であり、内容は百科事典とWikipediaの機能的差異性を百科事典の概念を基に分析するものである。この論文は2016年度内に投稿予定である。また、今年度は、学校教育高度化センターによる若手研究者育成プロジェクトに採用され、本研究室修士課程の朱とともにグループ研究を行った。「ディスレクシアを持つ児童生徒にとって読みやすい和文組版要素の研究」という研究タイトルで申請し、研究内容は、ディスレクシアの人に読みやすい和文書体の開発とその評価実験である。

(図書館情報学研究室 修士課程)

[朱心茹]

本年度は昨年度に引き続き、「発達性ディスレクシアに特化した和文書体」に関する研究を行いました。

研究の進捗について、2016年7月に情報処理学会第135回コンピュータと教育研究会で「発達性ディスレクシアに特化した欧文書体の特徴」という題目の口頭発表を、2016年9月にJapanese Association for Digital Humanities Conferenceで“Characteristics of a Japanese Typeface for Dyslexic Readers”という題目のポスター発表を行いました。前者の発表では学生奨励賞を受賞しました。

これらの研究は一部「山田翔平(代表研究者)・朱心茹、発達性ディスレクシアを持つ児童・生徒にとって読みやすい和文組版要素の研究、東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター若手研究者育成プロジェクト」の支援を受けて行われたものであるため、2017年2月にストックホルム大学と共同で開催される国際シンポジウムでの研究発表を予定しています。

また、これまでの研究に基づいて修士論文「発達性ディスレクシアに特化した読みやすい和文書体の研究」を執筆しました。

[宮本愛]

本年度は、修士論文「戦前期東京における公共図書館の利用者 - 女性に焦点を当てて -」を執筆しま

した。戦前における図書館の利用者の実態を、特に当時図書館利用におけるマイノリティーであった女性を中心に明らかにすることを目的とし、当時の利用者数や利用者の職業・年齢、利用者の利用傾向を、戦前期に作成された史料をもとに調査しました。史料調査に伴い、戦前期に作成された図書館業務資料を実際に手に取ったことは、自分にとって貴重な経験となりました。

授業に関しては、総合ゼミでの発表を通じて教授や院生の皆様から貴重なご意見をいただき、修士論文執筆において多くの知見を得ることができました。また、10月に行なわれた筑波大学大学院図書館情報メディア研究科との合同ゼミでは修士論文の進捗状況について発表を行ない、筑波大学の皆様からも有益なアドバイスを多数いただきました。

本コースの先生方・研究室の皆様には、2年間大変お世話になりました。感謝申し上げます。

[岩井美樹]

本年度の研究活動は以下の通りです。

学会発表:2016年6月にコペンハーゲンで行われたTKE2016で、「Cross-lingual correspondence between terminologies: The case of English and Japanese」の研究発表を行いました。また、12月にも大阪で開催されたCOLING2016のワークショップに参加し、「A method of augmenting bilingual terminology by taking advantage of the conceptual systematicity of terminologies」の研究発表を行いました。本会議にも参加しました。

研究室ミーティング:昨年から引き続き、研究室ミーティングを月に1回程度行いました。

修士論文の執筆:修士論文「専門語彙の構造的特徴を活用した対訳専門用語集の拡張手法の提案」の執筆を行いました。

[唐麟源]

学際情報学府学際情報学専攻浦浦研究室修士課程2年の唐です。今年度の研究活動は、主に修士論文の完成に向けたものです。学習カリキュラムに従って、学府の講義に出席する以外に、複数のゼミナールに参加しました。方法論ゼミでは、確率と統計の学習を通し、本の読み方と思考の仕方をめぐる訓練を受け、学習と研究の方法論についての認識を深めました。また、去年から開始した、研究室に所属す

る修士1年生が集まったM1ゼミは、今年から新たなメンバーが加わり、研究ゼミと名を改めました。それぞれの学位論文の完成に向けて、進捗を確認し合い、有益な刺激と意見を互いから得られる場所となっています。自分の研究に関して、研究テーマは言語の表層的なレベルにおけることばの一貫性と安定性と確定した。それを分析するための材料である国会会議録の形式的特徴について、2016年9月に開催された社会言語科学会の第38回大会においてポスト発表を行いました。今後、研究成果の共有とアウトプットを意識しながら研究を進めていきたい。

(社会教育学・生涯学習論研究室 博士課程)

[大山宏]

本年度行った研究活動は、以下の通りである。

1. 論文

・「東京都基礎自治体における青少年教育施設設置状況の推移」『生涯学習基盤経営研究』第41号、2017年3月

2. 書籍

・『大都市・東京の社会教育 歴史と現在』(東京社会教育史編集委員会編、2016年9月)の一部執筆(p.536~557、井口啓太郎・橋田慈子と共著)

3. 報告書

・東京大学大学院教育学研究社会教育学・生涯学習論研究室『「まち」をフィールドにする―岡さんのいえ TOMO』・「街 ing 本郷」院生プロジェクト報告一』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第11号) 2016年、pp.4~5、8~12 (西川昇吾と共著)、16~17、19~21 (中川友理絵と共著)、21~23 (松尾有美・中川友理絵と共著)、25~26

・東京大学大学院教育学研究社会教育学・生涯学習論研究室『地域社会への参加と公民館活動―飯田市の千代・東野地区におけるアンケート調査の分析から―』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第12号) 2016年、pp.69~73

4. 学会発表等

・「子ども・若者支援専門職の基本理念―“第三の領域”の視点から―」日本社会教育学会6月集会・プロジェクト研究報告、2016年6月(生田周二と共同発表)

・「青年期に求められる自立に関する史的考察」日本社会教育学会第63回研究大会、2016年9月

[金宝藍]

本年度行った研究活動は、以下の通りです。

【論文】

・「韓国の地域共同体運動における市民力形成に関する一考察」『日本社会教育研究』第52巻1号、p.33-43、2016年。

【書籍(共著)】

・郭珍榮、呉世蓮、金宝藍「韓国における単位銀行制と学習口座制の現況と課題」『躍動する韓国の生涯学習―市民・地域・学び』エイデル出版、2017年刊行予定。

【研究報告】

・「「市民力」の形成における「運動」の果たす役割に関する一考察―「シティズンシップ」概念の批判的検討をとおして―」日本社会教育学会第63回研究大会(自由研究発表)、2016年9月。

・「韓国の生涯学習における「地域とマウル共同体」」日本社会教育学会第63回研究大会(ラウンドテーブル)、2016年9月。

・「韓国のマウルにおける社会的経済―持続可能な地域社会をつくる力量形成に焦点を当てて―」第90回社会的企業研究会、2016年9月。

・「持続可能な社会をデザインする運動としての社会的連帯経済」第4セクター・社会的企業日韓研究交流会、2017年1月(早稲田大学)。

【(共同執筆)報告書】

・「韓国の平生教育・この1年」『東アジア社会教育研究21号』2016年12月。

・「2015年社会教育研究動向」『日本社会教育学研究』第52巻2号、2016年9月。

・「岡山県備前市地域活性化研究実習報告書」、2016年5月。

・「「まち」をフィールドにする―岡さんのいえ TOMO」・「街 ing 本郷」院生プロジェクト報告一」、2016年6月。

【その他】

・定例研究会(「韓国生涯学習フォーラム」、「東アジア社会教育研究会」、「社会的企業研究会」など)に関わり、本の編集・執筆・翻訳や研究会の運営企画などに参加

・翻訳：池熙淑「「住民の視点」から見た韓国平生教育活動家の実践と学び」、『東アジア社会教育研究21号』2016年12月。長澤成次「日本における社会教育政策の動向」、日韓学術交流研究大会資料

集,2016年11月.

・日本社会教育学会「通信広報」担当幹事.

〔山口香苗〕

今年度の研究活動は、以下の通りです。

〔論文〕

・「台湾における「社区大学全国促進会」の役割：社区大学法制化と公共課題解決プロジェクトの実行を中心に」『社会教育研究』第52号2巻，日本社会教育学会，2016.9.

・「台湾の社区大学における「公民社会」へのアプローチ方法：台北市文山社区大学を例に」『日本公民館学会年報』第13号，日本公民館学会，2016.11.

・「地域課題に取り組む台湾の地域学習施設：台北，台南，高雄市の社区大学を例に」，「台湾の終身学習・この1年：学習型都市，楽齡学習センターおよび職員の現状」，2編共に『東アジア社会教育研究』21号，2016.9.

〔学会発表〕

・山口香苗「台湾の社区大学による市民社会形成の特質：台北市社区大学3課程の学習者へのインタビューから」日本社会教育学会第63回研究大会（於：弘前大学）2016.9.17.

〔その他〕

・共著「2015年社会教育研究の動向」『日本社会教育学会紀要』第52号2巻，2016.9など。

〔杉浦ちなみ〕

本年は、以下に取り組みました。

〔論文・記事〕

・「民謡文化の伝承と学習と」『月刊社会教育』2016年6月号，pp.18-23，国土社

・「徳富猪一郎の『大江義塾』」(pp.20-32)，「飯田柳田国男研究会」(pp.304-323)，「合同討議 主題をめぐる二，三の問題」(pp.487-510，共著)北田耕也監修，地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造—「常民大学」の総合的研究—』2016年11月，藤原書店

〔翻訳〕

・「Chapter1 総説」(pp.5-13，共訳)，「Chapter2 文化」(pp.15-31，共訳)，「Chapter4 芸術との関わり方」(pp.59-109)，「参考文献」(pp.211-220，共同作成)デヴィッド・J・ジョーンズ著，新藤浩伸監訳『成人教育と文化の発展』2016年2月，東洋館

出版社

(口頭発表)

・“How the Regional People Learn their Folk Music in Japan: Amami Oshima” ISME Glasgow 2016, 32nd World Conference, 2016年7月29日
・「多様化する民謡の伝承—奄美大島から—」社会教育研究全国集会「地域文化の創造と社会教育」分科会，明治大学，2016年8月28日

〔西川昇吾〕

本年度の研究活動は以下の通りである。

〔論文〕

「社会教育学としての労働の意味づけに関する一試論」『東京大学大学院教育学研究科紀要』，第56巻，2017年3月発行予定

〔学会発表〕

「労働の意味づけに関する一考察—古代から近代にいたる労働思想史の検討を通して—」社会教育学会第63回大会（於：弘前大学）2016年9月

〔報告書〕

東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室院生プロジェクト『「まち」をフィールドにする—「岡さんのいえ TOMO」・「街 ing 本郷」院生プロジェクト報告—（学習基盤社会研究・調査モノグラフ第11号）』2016年6月，pp.8-13（大山宏と共著），30-31，45-46，56-57.

東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室飯田市社会教育調査チーム『地域社会への参加と公民館活動—飯田市の千代・東野地区におけるアンケート調査の分析から—（学習基盤社会研究・調査モノグラフ第12号）』2016年7月，pp.24-26，65-69.

〔須藤誠〕

本年は博士論文執筆に向けて自身の課題意識を深めていく一方で，他領域の研究者との交流も活発に行った年でした。具体的な研究活動は次の通りです。

〔国際会議〕

・Suto M "Rethinking the Role of Social Education and Lifelong Learning in Aged Society" The 3rd International Alliance of Research Universities Aging, Longevity and Health Initiative Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016.11.4.

・Yokouchi N, Horinuki F, Okada H, Sumikawa Y,

Suto M, Fukui C, Ogino R, Park H, Fujisaki M, Nagata S, Higuchi N, Goto J "Practice for supporting the decision-making of the persons with dementia: A field study of "Dementia café" " The 3rd International Alliance of Research Universities Aging, Longevity and Health Initiative Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016.11.4.

(国内シンポジウム)

・パネルディスカッション登壇&報告「地域活動の場をデザインする-柏市での実践より-」IOG/GLAFS 国内シンポジウム 2016 (東京大学) 2016.3.5.

(雑誌記事等)

・共同執筆「2015 年社会教育研究の動向」『社会教育学研究』第 52 号 2 巻, 2016. 9.

・「特集 高齢化社会に向けた学際的取組み 東京大学高齢社会総合研究機構のいま 5 閉じこもり高齢者へのアプローチ」『エルダー』第 38 巻第 5 号, 2016.5. (上述シンポジウムの取材記事です)。

(その他)

・日本社会教育学会第 63 回研究大会 (2016.9.16-18, 弘前大学) に参加し, 最新の研究成果に触れるとともに, 他大研究者との議論を深めました。

・昨年に続き, 研究室の他院生とともに世田谷区「岡さんのいえ」関係者に聞き取り調査を実施しました。

・ほか, 他研究科に所属する研究者とともに, 高齢化の進む郊外住宅地における住民活動の展開方法を検討する共同研究にも関わりました。

[松田弥花]

本年度は, 自身の研究テーマであるスウェーデンの Social Pedagogy (=Socialpedagogik) に関して現地で研究活動を進めた。具体的には, 歴史史料や文献の収集・読解・講読と, インタビュー及び観察調査である。

以上の成果を, 『社会教育学研究』第 52 巻第 1 号 (「スウェーデンの Socialpedagogik 概念にみる教育・福祉・コミュニティの関係性に関する考察」) や, 日本教育学会第 75 回研究大会 (於: 北海道大学) (「スウェーデンにおけるヘムゴードの考察—社会教育福祉論と Social Pedagogy の視点から—」, 名古屋大学・松田武雄と共同), 日本社会教育学会第 63 回研究大会 (於: 弘前大学) (「スウェーデンにおける Socialpedagogik の歴史的概念に関する研究—1900

~1930 年代を中心に—」, 個人) で発表した。また, 「The Nordic Educational Research Association 2017 (NERA2017): 北欧教育学会 2017」(於: オールボー大学) に参加し「The Differences between Social Pedagogues and Socionoms in Sweden」というテーマでインタビュー調査の内容を発表する予定である。

一方で, 副専攻である「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム (GPiNG: GLAFS)」における共同研究や, 研究室内の共同研究における報告書執筆活動を行った。

[入江優子]

今年度より, 社会人として常勤勤務の傍ら博士課程に進学しました。開かれた学校づくりや学校と地域の協働政策が進められ, 「社会の中の学校」の在り方が問われる中, 学校と社会の関係性に興味を寄せています。今年度は, 講義等を通じて研究の基本的視点や方法論を学びつつ, 高度経済成長期とバブル崩壊後の社会経済情勢や産業構造の変容に伴う「家庭の変容」という側面からみた学校と社会の関係性の変化について, 先行研究やデータの整理を進めています。

研究室の活動では, 『社会教育学研究』第 52 巻第 2 号における「2015 年の社会教育研究の動向」のまともに参加し, ジェンダー, 震災, 地域と学校に関わる実践研究の動向について執筆を担当しました。また, 院生プロジェクト研究「岡さんのいえ」の「岡's キッチン」プログラムに参加し, 参加者との交流の中で, 他団体の児童養護施設退所者向けプログラムの視察と意見交換の機会も得, これらを今後の研究に生かしていきたいと考えています。

[詹瞻]

今年度より本コースの博士課程に進学した。院ゼミや講義では生涯学習の理念や歴史, また各国, 各地域の生涯学習施設における活動の動向について学習した同時に, 個人研究には, 中国学術文献オンラインサービス (中国知網 CNKI) と上海図書館で「美術教育思想」, 「美術館教育」, 「文化公共性」といういずれも美術館関連するキーワードでタイトル検索して得られた文献, 書籍を対象に整理を行い, 中国の美術館における「陶冶」という言葉について再検討する作業を行った。修士論文の一部をまとめ直し

〔中国における美術館教育活動とその意義に関する一考察—歴史的な展開への視点から〕「東京大学教育学研究紀要」に投稿した。

その他、今年度は以下の活動を行った。①研究室における共同研究活動として社会教育学会の研究動向の整理を参加しており報告書に執筆した。②柏市豊四季台のくくるセミナー・中国語講座にて、講師として高齢者と言語、文化を学習した。

〔堀本暁洋〕

本年度、博士課程に進学しました。本年度の主な活動は以下の通りです。

1. 執筆

- ・「劇場・音楽堂における「参加」研究の構造と課題」『生涯学習基盤経営研究』第41号、2017年3月
- ・「鎌倉柳田学舎」北田耕也監修『地域に根ざす民衆文化の創造——「常民大学」の総合的研究』（藤原書店、2016年11月）pp.348-363.
- ・「第18分科会 地域文化の創造と社会教育」『第56回社会教育研究全国集会（東京集会）報告書』（社会教育推進全国協議会、2016年11月）pp.72-73.

2. 発表

- ・「劇場・音楽堂の管理運営計画の検討過程における住民参加—埼玉県富士見市民文化会館開館までを対象に—」文化経済学会（日本）2016年度研究大会、2016年7月

3. その他

- ・院生プロジェクトでNPO法人「街ing本郷」の活動に参加し、NPO総会での報告、通信の作成などを行った。
- ・2015年の社会教育研究の動向について、他の院生と共同でとりまとめ、原稿を執筆した。
- ・柏市高柳のキッズセミナー・楽器作り講座に講師として参加し、子どもたちと楽器の製作・発表を行った。
- ・地域文化研究会に参加し、常民大学の実践について共同研究を行った。また、鎌倉柳田学舎（鎌倉市）への調査を行った。

〔松尾有美〕

本年度の研究活動は以下のようである。

<論文>

- ・呉世蓮、金宝藍、松尾有美「韓国の平生学習・この1年」『東アジア社会教育研究』第21号、pp.86-95.

<学会発表>

- ・「韓国の共同育児に対する母親たちの意識の考察—ソウル市育児ブマシ団体に所属する母親に着目して—」日本社会教育学会第63回研究大会（自由研究発表）、2016年9月17日

<翻訳>

- ・梁炳贊「マウルづくり事業と草の根住民の主体形成」、盧京蘭「労働と平生学習」『躍動する韓国の社会教育・生涯学習—市民・地域・学び』（2016年3月刊行（予定）にどちらも掲載。）

<報告書>

- ・東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室院生プロジェクト『「まち」をフィールドにする—「岡さんのいえ TOMO」・「街ing本郷」院生プロジェクト報告—』（学習基盤社会研究・調査モノグラフ第11号）2016, pp.6-8, pp.32-33, p.45, p.57.
- ・東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 飯田市社会教育調査チーム『地域社会への参加と公民館活動—飯田市の千代・東野地区におけるアンケート調査の分析から—』（学習基盤社会研究・調査モノグラフ第12号）2016, pp.48-50, pp.58-65（中川友理絵、松田弥花と共著）

<その他の活動>

- ・院生プロジェクト研究：昨年度に引き続き、東京都世田谷区「岡さんのいえ TOMO」でイベントの運営補助や企画をした（通年）。
- ・東アジア社会教育研究定例会、韓国フォーラムへの参加：月に一回程度研究会に参加し、本の編集、翻訳、執筆活動、ラウンドテーブル（日本社会教育学会第63回研究大会9月18日）での報告に参加した（通年）。
- ・ものラボワークショップ：今年度は、昨年度までの高山に加えて岐阜でもサイエンスキャンプという形で、小学生高学年を対象にしたワークショップにスタッフして参加した（8月、10月～12月）。
- ・高柳、六小キッズセミナー：ジャンボかるたを使用して、小学生たちとかるた取りを楽しむ講座を担当した。

（社会教育学・生涯学習論研究室 修士課程）

〔大野公寛〕

本年度は主に修士論文「サイレント・マジョリティの学校参加論—島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクトを事例として—」の執筆をおこなった。

本論文は、参加型社会の出現に際して、さらに社会そのもののあり方を学校を核に組み換えようとする近年の政策動向のなかで、重要になると思われる、しかし制度の捕捉できない多くの住民に焦点をあて、その参加のあり方の実態を明らかにするとともに、時空論の観点から考察をおこなったものである。

他に以下のような活動があった。①昨年度に引き続き、NPO 法人街 ing 本郷にかかわりながら、モノグラフの発表や NPO の活動通信の復刊などをおこなった。②全国公民館連合会による全国公民館実態調査の結果の整理・考察をおこない、『月刊公民館』に発表した（大野公寛・末光翔・丹田桂太・永野恵「公民館のゆらぎと可能性」『月刊公民館』2016年6月号から2017年3月号まで掲載予定）。③卒業論文の内容を報告する機会を得た（自治体学会おおいの日田大会分科会4(公募企画),2016年8月20日）。

〔丹田桂太〕

本年度は主に、修士論文「近代学校教育制度と「地元」—青年のキャリア形成をとらえる視点の再検討—」の執筆に取り組んだ。本論文では、「地元」という場所での青年のキャリア形成を扱ってきた先行研究の議論の枠組みを、近代産業社会における「国民形成」の制度的装置としての学校教育とそのもとの「人間観」との関わりの中で捉え返すことによって、その問題性を指摘し、「地元」でのキャリア形成を積極的かつ肯定的に捉えていくために必要な視座を提示した。

また、昨年度末に大野公寛、末光翔、永野恵らと共同で執筆した平成 25 年度全国公民館実態調査結果検討報告書をもとに、雑誌『月刊公民館』の連載記事を執筆した。

さらに、院生プロジェクトの活動の一環として、昨年度より文京区の NPO 法人「街 ing 本郷」の定例カフェに継続的に参加している。とりわけ本年度は、広報誌「街 ing だより」の作成に取り組んでいる。

〔末光翔〕

昨年度に引き続き、精神疾患の子どもを持つ親や家族の学習活動について、その支援のあり方に関する調査を進めています。病気を患う当事者と共に暮らす家族は、その対応の難しさや将来の見通しのつかなさや疲弊しがちです。それに対して現在、関東

近辺の家族の集まり（家族会）を中心に、家族自身が学習を通して元気になることを目指す「家族による家族学習会」の取り組みが行われています。この取り組みは、既に数年間にわたってその効果や重要性に関する調査が行われ、有志の家族や NPO の関係者により全国各地域の家族会への普及を目指されている段階にあります。

その中で自分は、有志の家族が各地域の学習会活動をサポートしていく方法について、特に学習会活動の「振り返り」や「実践記録」の役割に注目して調査を進めています。今年度は、昨年度行った家族への聞き取りを元に、学習会活動のサポートに関するマニュアル改訂作業を行い、また実際に埼玉、千葉、横浜にて取り組まれている家族学習会の見学、聞き取りを進めています。

〔永野恵〕

本年度は、修士論文『公立文化ホールにおける指定管理者制度に関する研究 - 「協働」による「地域ガバナンス」に着目して -』の執筆を中心に研究活動を行った。論文執筆にあたり熊本県立劇場、三重県総合文化センターにて聞き取り調査を行い、財団運営による公立文化ホールの実態調査を行うとともに、その実態が近年注目される「協働」による「地域ガバナンス」という地域経営方法にどのように位置づくのか分析を試みた。

また研究室同期と共同の活動としては、公益社団法人全国公民館連合会が実施した全国公民館実態調査の結果を分析・考察し昨年度末に執筆した報告書をもとに、本年度は雑誌『月刊公民館』にて6月号から計9回にわたり記事『公民館のゆらぎと可能性 平成 25 年度全国公民館実態調査調査結果検討報告』の連載を行った。

院生プロジェクトでは、東京都世田谷区の「岡さんのいえ TOMO」にて、「開いてるデー」や「サンデークラブ」、「岡's キッチン」の活動に参加した。

〔佐藤志保里〕

本年度より修士課程に進学した。院ゼミには後期から参加し、文献講読や討論を通じて社会教育・生涯学習の基本的な視点や研究の方法論について学んだ。研究の関心としては、困難な立場にある人が自分の人生をゆたかに生きようとするときにどのような支援ができるかということである。本年は障害者

就労支援施設である NPO 法人「きらら女川」および「ゆめ工房」にて活動をともにしながら調査を行った。困難を抱えながらよりよく生きようとするあり方、自身が社会の中に確かに位置づいていると実感をもって生きるにはどうしたら良いかについて考えながら、今後さらに焦点を明確化し先行研究の整理や聞き取りを行っていく予定である。またこれからも教育学について知見を深めるため、文献講読を進めた。

〔鯛仁和〕

本年度 4 月より修士課程に進学した。院ゼミや講義を受けることを通して、社会教育生涯学習における基本的な考え方や方法論についての考えを深めた。また、学部ゼミでも文献講読を行い、さらに長野県飯田市でフィールドスタディを行った。その後追加調査で再度飯田市を訪れ、通学合宿の取り組みについてインタビュー調査を行い、この調査をもとに報告書を執筆した。

個人の研究においては、個人の想いは語りにどのように現れるのか。人はまちに対する想いをどのようにつくりあげていくのか。その想いをどのようにして汲み上げていくことができるのか。これらのことについて興味を持っている。学部生の時から関係のある岩手県大槌町や長野県飯田市などを何度か訪問し、交流を続けている。これからも交流や語り合いを続けながらそこから見えるものについて考えていきたいと思っている。それと並行して、関連文献にあたりながら問題関心・課題設定を明確にしていることと考えている。

〔福森敏也〕

「学び」を通じたまちづくりに興味があり、全国各地の取り組みに関心を持っている。研究テーマは二転三転している現状であるが、最近では「なぜ『地域振興』は目指される(べき)か」という根本の疑問に立ち返りつつ、各地を訪れたり文献にあたったりして思索を深めている。具体的には以下のような活動を行った。

- ・世田谷区「岡さんのいえ TOMO」での活動。特に児童擁護施設退所者の居場所づくりを目的とした「岡's キッチン」では、準備から振り返りに至るまで、中心的スタッフとして関与している。
- ・長野県飯田市にて「飯田型公民館」の特徴と広が

りについて調査中。飯田市を仲介に、飯田と関わりのある兵庫県尼崎市にも訪問した。

- ・産学連携プロジェクト「ものラボ JAPAN」の活動。コアスタッフとして岐阜県高山市、岐阜市で小学生向けワークショップに参加した。
- ・AWS 気仙沼プロジェクトの活動。本研究室と関係はないが個人的に参加し、東日本大震災の被災地に歌を届けつつ、同時に復興の現状や課題などについて話を伺ったりしている。

〔松本奈々子〕

2016 年 4 月に修士課程に入学した。

(1)個人研究

個人研究の関心は、伝統文化と地域の関係、とくに無形伝統文化財「祭」の保存活用継承活動にある。近年、伝統文化を自治体再生の資源として活用する実践が増えている。また、形が変わりうる無形伝統文化財を、保存あるいは再構成するののかについての判断は各地域の戦略に委ねられている。現代の社会、それぞれの地域の文脈において、伝統文化を読みとき解釈する活動群に注目し、伝統文化の/と地域について考察したいと考えている。

(2)授業

社会教育学・生涯学習、文化社会学、宗教社会学、質的研究方法等

(3)研究室の活動

- ・日本社会教育学会紀要 2015 年社会教育研究動向の執筆
- ・柏地区キッズセミナー「万華鏡のひみつ」の講師を担当
- ・岐阜サイエンスキャンプに参加
- ・街 ing 本郷の活動に参加
- ・飯田市でのフィールドワークに参加、「華齢なる音楽祭」における多世代交流について調査及び報告書執筆

(社会教育学・生涯学習論研究室 研究生)

〔楊映雪〕

本年度は授業とゼミに参加し、社会教育学研究の基礎となる知識および方法論等について勉強した。夏休みに、長野県飯田市のフィールドワークに参加し、当地の市民や高校生と交流した。8 月に千葉県柏市との共同企画「キッズセミナー」の活動に参加し、1 月に「くるるセミナー」の中国語講師を担当

する予定である。また、「プラチナ未来スクール・ロボット教室」の補助スタッフとして、子供と一緒にレゴロボットを製作した。理論および現場から、日本の社会教育・生涯学習、そして現代社会の課題に関して幅広い知見が広がり、研究を行うための情報収集力、学术论文の作力、また論理的な思考力などが徐々に高まってきた。

個人研究としては、昨年度に引き続き、研究関心である上海市の「広場ダンス」について先行研究を調査した。問題関心としては、現在の中国社会に感じている「生き辛さ」に対して、ダンス者はなぜ「たくましさ」を呈示したのか、またそれは現代社会にどのような関係があるのかについて見ていきたいと考えている。

学位論文

博士論文

2016年12月(課程博士)

歌川光一「近代日本における中上流階級女子のたしなみ像—19世紀末から20世紀初頭東京の音楽文化に着目して—」

2017年2月(課程博士)

宮田玲「Controlled Authoring for Document Multilingualisation Using Machine Translation (機械翻訳を活用した多言語文書展開のための制限オーサリング)」

2017年2月(論文博士)

上原直人「公民教育としての社会教育の形成と展開—1920年代から戦後改革期における思想分析を中心に—」

修士論文

2017年3月

朱心茹「発達性ディスレクシアに特化した読みやすい和文書体の研究」

宮本愛「戦前期東京における公共図書館の利用者—女性に焦点を当てて—」

岩井美樹「専門語彙の構造的特徴を活用した対訳専門用語集の拡張手法の提案」

唐麟源「ことばの安定性:言語使用を可能にする条件について—日本国会における首相答弁を例に—」

大野公寛「サイレント・マジョリティの学校参加論—島根県立隠岐島前高校魅力化プロジェクトを事例として—」

丹田桂太「近代学校教育制度と「地元」—青年のキャリア形成をとらえる視点の再検討—」

永野恵「公立文化ホールにおける指定管理者制度に関する研究—「協働」による「地域ガバナンス」に着目して—」

図書館情報学研究室教員・院生一覧

教授 影浦 峽

客員教授 吉田 右子

博士課程 井田 浩之
高橋 恵美子
宮田 玲
志村 瑠璃
新井 庭子 (学環)
矢田 竣太郎
山田 翔平

修士課程 朱 心茹
宮本 愛
岩井 美樹 (学環)
唐 麟源 (学環)

研究生 韓 尚珉
朴 恵

修士課程 大野 公寛
末光 翔
丹田 桂太
永野 恵
付 雨菲
栗田 智美
佐藤 志保里
鯛 仁和
福森 敏也
松本 奈々子

研究生 楊 映雪

社会教育学・生涯学習論研究室教員・院生一覧

教授 牧野 篤

准教授 李 正連
新藤 浩伸

特任助教 松山 鮎子
古壕 典洋

博士課程 大山 宏
金 宝藍
中川 友理絵
山口 香苗
相良 好美
杉浦 ちなみ
西川 昇吾
須藤 誠
松田 弥花
入江 優子
詹 瞻
堀本 暁洋
松尾 有美